

4. 1 電子ジャーナルの現状

国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース主査
名古屋大学附属図書館長
伊藤 義人

1. 電子図書館機能における電子ジャーナルの位置づけ

大学図書館がおかれている新しい時代の背景について述べる。数千年続いた紙媒体（印刷媒体は500年）を主体とした図書館機能は、デジタル情報の急速な進展によって大きな転換を求められている。インターネットに象徴される高度情報社会における図書館機能として、従来型の図書館機能と電子図書館機能を融合したハイブリッドライブラリーが求められている。

一方、19世紀、20世紀型の学問領域から21世紀型学問領域へのパラダイム転換が起こっており、日本の産業構造の変革要求と相まって、日本の大学環境は劇的な転換を迫られている。国立大学の法人格取得に伴って、大学図書館も大きな変革を迫られている。

このような環境において、日本の大学の電子図書館機能の中での電子ジャーナルの位置づけについて説明する。

2. 電子ジャーナルの現状と将来

電子ジャーナルの歴史的な発展経緯と現状を概観するとともに将来の問題点などを説明する。5年前に現状を予測していた図書館人は、ほとんどおらず、今後5年後についての予測も非常に難しいが、時代に合致した学術基盤整備のために、さらなる電子ジャーナルに対する対応が求められている。

3. 国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースの活動

学術雑誌購読の危機的な状況を回避して、新しい学術基盤としての電子ジャーナルの普及を図るために、現状においてはコンソーシアム形成が最良な方法である。図書館は受け身的な購読仲介者から、学術情報流通の主体の1つとなり、連合して将来の学術情報流通のあり方を踏まえて、出版社と協議を行う必要がある。

平成12年9月に設立された国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースの設立からこれまでの活動を概観し、今後の問題点を明らかにする。

出版社とのコンソーシアム交渉においては、強力な交渉主体が必要であることを強調する。

4. 電子ジャーナルの利用と普及における図書館の役割

これからの附属図書館および職員に求められる役割について概説する。特に電子ジャーナルのように、情報技術の発展によって、急速に普及し、従来の冊子体の雑誌の性格を大きく変貌させ、学術基盤としてさらにその重要性を増している状況に対して、図書館人が果たすべき役割について私見を述べる。

国立大学は平成14年度に法人格を取得して、自立的に活動する必要があるが、これを支える大学図書館のあり方を考える必要があるが、電子ジャーナルに関しても公立、私立大学図書館との連携協力も重要となる。

これらに対処するための決まった答えが用意されている訳ではなく、学内外の連携と競争の中で従来不可能とされているようなことも企画立案し実行する能力を今後要求されている。具体的に企画立案のプレゼンテーション能力や交渉能力も強く求められるであろう。

5. まとめ

全体のまとめと展望について説明する。モバイル環境、ユビキタスコンピューティングなど新しい情報技術を活かした知恵を出し、図書館が学習、教育、研究を支援する機能をさらに発展させる必要性について述べる。

なお、具体的な内容については、PowerPoint を用いて説明する。